

---

# Salamander -炎の化身-

朱夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

S a l a m a n d e r - 炎の化身 -

### 【Nコード】

N 5 1 2 1 Y

### 【作者名】

朱夜

### 【あらすじ】

故郷を焼かれ、戦場奴隷として捉ええられた少年「ガイウス・ヴァーミリオン」は、戦場で狂気と憎悪を生み出し、自らの真の力を覚醒させる。そんなガイウスを救ったのは敵国である、帝国「アルガイザム」の女性騎士隊長「レオナ・フォン・ルートガイド」、レオナと共に帝国へと渡ったガイウスはそこで新たな生活を手に入れる・・・。

この物語はガイウスと言う少年の成長を描いた物である。

## プロローグ

紅蓮の炎が街を包む、逃げ惑う人々、死臭が蔓延するこの街に、既に生者はいない。

街のすぐ外に、今尚燃えつつける故郷を見つめる幼き瞳。

ガイウス・ヴァーミリオン。

銀の髪に紺碧の瞳を持つ美しい少年は、その瞳に何を思っているのか……。

死臭がする。当然だ、ここは戦場なんだから。

ガイウスは戦場にいた。故郷を焼いた敵国の戦場奴隷として。ぼろぼろの防具とすぐに折れてしまいそうな剣を手に、ガイウスは敵と戦っている。

何故子どもがいるのか？ ガイウスと同じ年程の子ども達は何百人もいる中で、大人達は平気な顔をして剣を振るう。

剣が、槍が、斧が、子ども達の柔らかい肌を犯していく。

一人、一人と少なくなっていく子ども達の中で一人、ガイウスは狂気と憎悪に吞まれていた。

故郷を焼かれ、自分を逃がすために命を捨てた両親、守れず、失っ

た大切な姉。

その全ての元凶に捉えられ、身勝手な理由で戦場に放り込まれた。幼いながらも賢かったガイウスは次第に狂気へと向かって行く。

（こいつらがいるから）

（こいつらがいなければ）

（殺してしまえ）

（皆いなくなってしまう！）

思ったと同時に、体から溢れる熱量。

それは、周囲を焼き、絶叫を呼ぶ。

小さな子どもから放たれる確かな狂気、憎悪、怒り、それらが炎となって大人達に殺到する。己の故郷を焼いた同じ炎を味わう大人達の顔に、ガイウスは子どもらしからぬ笑顔を浮かべる。

しかし、それも長くは続かなかった。

炎の一角が消え、一人の女性が現れた。

歳の頃20と言う若さだろう。

金色の髪に深緑の瞳、冷たい双眸がガイウスを見つめる。

その瞳には、哀れみと、悲しみ、そして救いたいという微かな願い。女性は炎に焼かれるのもいとわず、ガイウスへと近づいて行く。

ガイウスは目の前の女性を焼き殺そうと炎を放つが、制御のできていない炎は四方へととび、兵士を燃やす。

「ウウウウウ・・・」

既に獣のような声しか出せないガイウスを、女性は悲しげな瞳で見つめる。

「大丈夫、お前は一人じゃない」

悲しげな瞳から一点、優しい瞳になった女性に、ガイウスは炎を納める。

しかし、既に周囲の木々や大地に燃え移った炎は消えることはない。

「私がお前の家族となろう、共にこい」

「ア・・・・・・・・アアア・・・・・・・・」

ぎゅっと抱きしめる女性の腕に包まれて、ガイウスは声にならない声を漏らして涙を流す。

その翌日、ガイウスを戦場奴隷として捉えた国「リッド」は帝国「アルガイザム」に滅ぼされたのである。

## 第1話 帝国「アルガイザム」(前書き)

作者は基本的に思いつきで書くタイプですので亀更新を許してください。

## 第1話 帝国「アルガイザム」

私の名は「レオナ・フォン・ルートガイド」。

帝国「アルガイザム」の軍に勤める女性騎士隊長だ。

今回の作戦により、敵国「リッド」に侵攻していた私は疑問に思ったことがある。

子どもが多い、戦場で数百人程度の子どもが素朴な防具と剣を手に戦っている。

なんだあれは、素直に思った。

それと同時にリッドに憎しみが湧いた。

年端もいかない子ども達に剣を持たせ、あまつさえ殺し合いをさせるなど、レオナは怒りに狂っていた。

怒りにまかせ、いち早くこの争いを終わらせるためにも単身、敵の一角へと突撃しようとした。その時だった。

リッドの陣営で火の手が上がった。

燃え盛る炎はリッドの兵士を燃やし、我が国の兵士さえも飲み込んで行く。

能力の覚醒、あの炎の量からして間違いないだろう。

私はすぐさま能力を使用し、味方に炎があたらないように風を起こした。

風向きにより、リッドの兵士に炎が向かうことになるが、敵である兵士に情けは無用。

そして私は能力を覚醒させた少年に出会った。

それが、一昨日の話だ。

帝国「アルガイザム」

広い国土に豊富な資源に恵まれたこの国は、別名「神の愛した国」と呼ばれている。

現在の国王「バーク・エルトア・アルガイザム」は賢王とも呼ばれる程に賢く、そして民の事を第一に考える王だ。

国民からの支持もあり、政治経済も人より頭一つ以上抜け出た手腕の持ち主だ。

それで齡40だと言うのだから驚きだ。

国王の厳命により、国で取り決められた政策や経済発展の方法は全て国民に開示されている。それがより国民の人気を煽る要因でもあった。

国民が住みやすいようにと医療組織に力を入れ、城下に汚れ一つないようにと清掃組織までもが作られている。

人々は住みやすい環境の中、和気藹々と日々を過ごしている。

そんな街にやってきた、ガイウス・ヴァーミリオン。

引き取り人となったレオナに引き連れられ、ガイウスはこの国の王に謁見をしているところだった。

左膝をつき、騎士の礼を取るレオナにバークは軽く右手を上げて返す。

立ち上がったレオナに、バークは言う。

「先の戦い、ご苦労であった、こちらの被害も少なく、リッドの地も破壊せずに手に入れることができた、そなたの功績には感服する」

「ありがたきお言葉です」

「して、その子どもは？」

バークは、先ほどからレオナの後ろに隠れているガイウスを見て言った。

「はっ、この少年はリッドにて戦場奴隷として捕われていた少年であります、戦場にて、能力の覚醒を感知し、私が引き取り人となりました」

「奴隷？ リッドの者か？」

「いえ、聞いたところによると、リッド近くにある「ウイステイル」の出身です、数日前ウイステイルはリッドの手によって焼かれたので・・・」

「なるほど・・・しかし、その少年が故郷を焼いたと言うことは考えられないのか？」

「それは無いかと、戦場で、彼は常人ではあり得ない程の炎を放ちました、それは恐らく、能力者が能力を覚醒させたときの症状に似ているかと」

「分かった、その少年の処遇はお前に一任する、少年、名前を教えてくださいるか？」

ガイウスは、レオナに背中を押されて前に出る。

一国の王の前で名を名乗ることがどれだけ恐れ多いことが、幼いながらもガイウスは理解していた。理解しているからこそ、言葉が出なかった。

「ガイウス、陛下はお優しい方だ、緊張することはない」

と、上から振って来る声にガイウスは肩の力を抜いた。

「ガイウス・ヴァーミリオンです、バーク王帝陛下」

「ガイウス・ヴァーミリオン、しかと覚えた、そなたの力は強大で恐ろしい物かも知れぬ、しかし同時に大切な者を守る力にもなりえるだろう、その力の使い方、間違えぬようにな」

「ありがとうございます」

ガイウスの代わりに、レオナが答えた。

「レオナよ、そなたには、しばしの間休養を言い渡す、では、下がれ」

「はっ」

ガイウスはレオナに手を引かれ、謁見の間を後にした・・・。

王城の廊下に出ると、レオナを待っていたかのように一人の男が近寄る。

「よお、レオナ隊長」

「エドワード隊長」

その男、エドワードは肩より少し下の位置まで亜麻色の髪を伸ばし、軍服に身を包んでいた。

「私に何か用か？」

「用って程のもんじゃないが、堅物のあんたがガキを拾ったって聞いたんでね」

「この子にはガイウスと言う名がある」

「へえ、ガイウスってのか」

レオナの後ろで隠れていたガイウスを覗き込むようにしてエドワードは屈んだ。

「俺の名前はエドワード・ディゾン、第二騎士隊長だ」

ガイウスは差し出された手をじっと見、それからエドワードを見る。エドワードは何を考えているのか相手に分からないような笑みを浮かべている。

ガイウスが手を出すと、エドワードはそれを逃がさないようにぎゅ

つと握った。

あまりの強さに一瞬身を震わせるガイウスだったが、エドワードは緩く手を上下に揺らすと手を放した。

「今日は挨拶しにきたただけだ、じゃあな」

そう言つて、エドワードは去っていく。

取り残されたレオナとガイウスは互いに顔を見合わせ、首をかしげた。

レオナは城下の貴族街の一角に屋敷を構えていた。

当主である父と、それを補佐する母と、数人の使用人との生活は大きな屋敷に比べて質素だと言える。

ガイウスは、レオナの父である「フラン・フォン・ルートガイド」と母「ルーナ・フォン・ルートガイド」と対面していた。

「この子が能力の覚醒を……余り、信じられる話ではないが」

「あなた、レオナが嘘をつくはずがないでしょう、その理由もないのですから」

「父上、母上、ガイウスをこの屋敷に置いておかまわないでしょうか、面倒は私が見ます故」

「ああ、好きにすると良い、ガイウス君、ここはもう君の家だ、好きなようにすると良い」

そう言って、ガイウスの頭をその大きな手で撫でた、その手は、今は亡き父と同じものだった。  
あまりのことに理解ができずにいたガイウスだったが、うれしいという感情だけは理解できていた。

## 第2話 「家族」(前書き)

短いです。

## 第2話 「家族」

ガイウスが屋敷にきて早三日、夕食をとり終わったガイウスはレオナの両親と話していた。

レオナは今日、城で会合があるらしく、それに出席している。

「故郷では何をして過ごしていたんだい？」

「僕の父さんは街の警備隊の隊長だったから、お父さんみたいになりたくて剣の修行してた」

「同年代の子と遊んだりはしなかったの？」

「街は子供が少なく、僕が一番小さかったから、同年代の子はいなかった」

それを聞いたフランとルーナは困った顔をする、何かしら子供が遊ぶようなおもちゃをプレゼントできれば、と考えていた二人にとって父のようになりたいから、と幼いながらに剣を振っている子供は見たことがないからだ。

娘であるレオナでさえ騎士になりたいと言ったのは10歳の時だったのだから。

半分である5歳のガイウスに剣を与えるのは不安なのである。

しかし、能力が覚醒した今、能力の制御を学ばせることは必須だ。

「ウイステイルには学校がないと聞くが、文字は書けるのか？」

「お母さんから文字を教わったから書けるよ、古代語フイックも少しなら書けるし、読めるよ」

「古代語を！？ それは驚きね」

古代語はこの世界テイターニアが創生されてから使われていたと学者が発表した言語で、今も世界中の遺跡等で見つかることが多い。文明を残した物や、当時の生活、国家の歴史、色々なものがある。

「そうなれば、学校に通うことは可能だな」

「僕、学校に通えるの？」

「ええ、そうよ、でも初等部は中途入学がダメだから中等部からね」

「でも……………」

「いらぬ心配をするな、ガイウス、お前はもう私たちルートガイド家の人間だ、家族なのだよ」

「家族……………」

フランの言葉を聞き、ぽつりと言葉を漏らすガイウスにルーナが優しく微笑み、うなずいた。

一度は失い、もう二度と戻ってはこないものを手に入れた喜び、ガイウスは自然と涙をこぼしていた。

「そうと決まれば初等部で習うことを教えなくちゃね、勉強は私が見てあげるから、貴方、剣術を教えてあげなさいよ」

「わかった、早速明日から始めるとしようか」

「私もそうしようかしら」

二人の間でとんとん拍子に話が進んでいく、するとそこへ、帰宅したレオナが入ってきた。

「ただいま帰りました、父上、母上」

「ああ、おかえりレオナ」

「おかえりなさい」

喜色の声で出迎えた両親にレオナは何か何だかわからない、と言う顔をする。

傍によってきたガイウスを見て「どうした？」と言う。

「おかえり、レオナ」

ふっと笑うと、レオナはガイウスの頭に手を置き、「ただいま」と言った。

「父上と母上はどうしたのだ？」

「僕が字が書けて古代語も少しだけできるって言ったら勉強を教えるって、後剣も」

「古代語が読めるのか？　すごいな、私はそういう手合いはまったくだめだからな、うらやましいよ」

素直に褒めてくるレオナに少し照れるガイウス、いまだにフランとルーナは盛り上がっている。

二人をよそにガイウスとレオナは部屋を後にした。

「私からも能力の制御を教えよう」

「レオナの能力って、何？」

「私か？ 私の能力は風だよ」

「風………、僕、風好きだよ、暑い日に涼しい風が吹くと気持ちいいもんね」

「そうか、私も火が好きだよ、危険だが、寒い時は体を温めてくれるからな」

そう言ったレオナに、ガイウスは少しだけ暗い顔をした。

「怖いかな？ 炎が」

「うん」

「だが、覚醒した以上これから何かあれば炎が出る、強い感情があれば、それは能力となって現れる、もともと能力者の数は少ないが、炎の能力者は私の知る中では何人もいる、しかし、どの能力者も総じて炎の質が違ったんだ、ガイウス、まだ難しいかもしれないが、お前の炎はお前だけのものだ、だから、お前が何のために炎を使うのかを、考えると良い」

「うん、ありがとう」

「お安い御用だ、さあ寝よう、私は疲れたよ」

レオナの部屋の向かいが、ガイウスの部屋になっている。

「おやすみ、ガイウス」

「おやすみ、レオナ」

そう言って二人はそれぞれ部屋に入る。

ベッドにもぐりこんだガイウスは、先ほどの会話を思い出し、少しだけ嬉しそうな顔をしたのである。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5121y/>

---

Salamander -炎の化身-

2011年11月18日04時30分発行